へるめす（岩波書店）
1996年 9月号

Hermes Eye

Book Review

ミハイル・ゴルバチョフ
ゴルバチョフ回想録（上・下）

塩川伸明
Shiokawa Nobuaki

かつてゴルバチョフが退陣してまもない時期の小文で、私は、「あまりにも人間の理性を信じすぎるタイプの指導者であるために時代に対応できなかったゴルバチョフ」と書いたことがある（「ペレストロイカとその後――『民主化』のパラドクス」和田、小森田、近藤編『〈社会主義〉それぞれの苦悩と模索』日本評論社、一九九二年、二二〇ページ）。今回、この回想録を読み、そしてまたロシアの大統領選挙に参加してごく低い得票率しか集められなかった彼をみて、この感慨を改めて強めた。

1996

回想の内容は、それだけみれば実に正論であり、まともな主張の披瀝である。一方では改革を妨害しようとする保守派、他方では、改革の加速を焦るあまり社会の分極化と混乱を促進し、あるいはポピュリスト（大衆迎合主義）的デマゴギーで破壊的な役割を演じる急進派――この両者に挟み撃ちにされながら、何とかして変革のコストを最低限に抑えつつ平和裡の漸進的改革を実現しようとする指導者像がそこには描かれている。最終段階では次第に不利な状況に追い込まれながらも、最後まで両派の間でのきわどい綱渡りを試み続けたその努力は感動的でさえある。

もちろん、政治家の回想というものが自己弁明、自己正当化の要素を含むのは常のことであり、すべてを額面通りに信用するわけにはいかない。本書の中にも、自己弁護的なニュアンスを感じる個所はいくつか散見される。また、今なお現実政治復帰の野心を捨てていない著者としては、「回想」といっても、完全に現役から退いた位置から書いているわけではなく、一定の政治的思惑をもって書いていると感じられる個所もある。今日なお語れない、あるいは語りたくない事項も当然あるだろう。いくつかの戦術や人物判断、政策転換のタイミングなどに関して、誤りをおかしたことを率直に認めて自己批判している点は好感がもてるが、その誤りの原因についての掘り下げが足りないといった批判も可能だろう。そのような留保をつけた上での話ではあるが、全体としていえば、本書の語り口は相対的に率直なものであり、読者の理性に訴えるその書き方は、説得力に富んでいる。

それでいながら、読んでいて何となく落ち着かないのは、結局、

彼は敗れざるを得なかったという冷厳な事実をわれわれは知っているからである。そしてまた、本書刊行の少し後に、われわれの眼前で展開されたロシアの大統領選挙1996でも、彼は惨敗を喫した。事前の世論調査で「泡沫候補」的な支持率しかないことを知りながら、最後まで立候補を撤回せず、「世論調査は当てにならない。自分こそはエリツィン、ジュガーノフのどちらにも不満な国民の期待を担える候補であり、決選投票に残れる自信はある」といい続けた彼は、あたかもピエロのようにみえた。ここには大きな落差がある。

ペレストロイカ当時のゴルバチョフも、諸外国ではほぼ一貫して高い評判を得ていたのに対し、ソ連国内では、ある時期以降次第に人気を低下させていた。今回の回想も外国の読者にとっては説得力もあり、読みごたえもある興味深い著作なのだが、そうした著作の刊行も、自国において国民を説得して支持を獲得することには全く貢献しなかった。ここにゴルバチョフという人の悲劇性があり、歴史の非情さということさえ考えさせられる。

政治家は引き際が大事だとよくいわれる。ゴルバチョフと比較的似たところのあるポーランドのヤルゼルスキは、体制転換への軟着陸をともかくも成し遂げた直後にきれいな引き際を見せたおかげで、戒厳令施行という極度に不人気な政策で出発したにもかかわらず、いまでは相対的に良好なイメージで記憶されている。これに比べ、あれほど大きな功績を世界史に記したゴルバチョフが、現在のロシア政治ではピエロとしか映らないのは、そのような「きれいな引退」をすることができなかったという事情によるのかもしれない。

以上では、政治家としてのゴルバチョフ評価における二面性に触れてきたが、こうした評価の両義性は、回想としての本書の衝撃性の度合にもある程度反映している。「超大国」の一つに数えられた――ほんの数年前までそうだったということが、今では信じがたいほどである！――国の最高指導者だった人間が退陣後に書いた回想ということから、センセーショナルな暴露を期待する読者がいるかもしれないが、実は、本書にはそれほどショッキングな新事実の暴露はない。もちろん、個々の点に関し、当時は公けにされなかった事実やそれぞれの時点の考えが記されており、われわれのペレストロイカ理解を深めてくれる貴重な資料には違いないが、大筋では当時観察されていたことを確認する叙述が主であり、これまでのペレストロ

木簡が語る古代史
〈上〉都の変遷と暮らし
平野邦雄・鈴木靖民編　発掘された膨大な木簡から、宮都の構造や変遷、貴族や官人の生活・文化を再現。3811円(下＝続刊)

真田昌幸（人物叢書 通巻209）
柴辻俊六著　安土桃山時代の智将。信玄・秀吉に仕え織豊期を必死に生き抜いた処世術と事跡を検証し実像に迫る。1803円

戦国・織豊期の徳政（中世史研究選書）
下村信博著　徳政を所有観念の発達という視点だけでなく、知行制との関係から論じ、戦国・織豊期社会を解明。2472円

肖像画の視線
―源頼朝像から浮世絵まで―
宮島新一著　肖像画は何を語りかけるか。鎌倉から江戸時代の肖像画の変遷・特質と日本人の精神世界を探る。3605円

緒方竹虎
―情報組織の主宰者―
栗田直樹著　新聞社の幹部から政界に転身。戦後政治に果たした緒方の足跡を追い、政治と情報の関係を考える。6695円

日本歴史叢書　新装版
桃山時代の女性
桑田忠親著　2472円
日本の鉄道
原田勝正著　2369円

'96年版『出版図書目録』・PR誌『本郷』No.7送呈。小社販売部までお申し込み下さい。

吉川弘文館
〒113・東京都文京区本郷7-2-8
電話03-3813-9151／定価は税込

イカ解釈を一八〇度ひっくり返すようなものではないのである。

このことを指摘するのは、本書が意外につまらない本だなどということを示唆したいからではない。あれほどの大事件の渦中にいた人の回想がつまらないはずがなく、手に汗を握る迫真性さえ備えているのは当然である。それでも前記のようなことを書いたのは、ペレストロイカ期におけるグラースノスチ（公開性）が相当程度本物であり、そのおかげで当時すでに情報の公開度がかなり高まっていたこと、そしてまたゴルバチョフという人が理性を信じるタイプの政治家だったため、当時においてもかなりの程度まで本音をさらして自己の主張を訴えており、当時の言説と今日の回想との間にあまり大きな開きがないことを確認したかったからである。本書がそれほどセンセーショナルな暴露を含まないのは、権力の座にあった時の彼が能弁かつ率直な政治家だったからであり、そのことこそが彼の大きな功績をなすのである。

翻訳について一言。文学者とジャーナリストの協力になる翻訳であるせいか、訳文は全体としてこなれており、読みやすい。トルストイの『戦争と平和』を越えるという大冊を、比較的短時間に、ここまで読みやすい形でわれわれに提供してくれた訳者の労を多としたい。ロシア語版では省略されている個所までも原著者の原稿に基づいて完訳したという点も、本書の資料的価値を考えると貴重である。ただ、これだけの大著ではやむを得ないことかもしれないが、いくつか誤訳ないし不適訳が目についた。その多くは、当時の政治情勢や政治経済上の専門用語をよく知らないか、歴史的経緯を十分踏まえていないために、文章の文脈をとりそこなったものである。この種の書物の翻訳は、文学者・ジャーナリストと社会科学者との共同作業としてなされるのが望ましいのではないだろうか。誤訳ないし不適訳の大半は細部にかかわるので一々指摘しないが、第四一章の表題に「われわれの全視点を社会主義に転じよう」とある点（正しくは、「社会主義へのわれわれの見地全体の転換」）、またフェデラーツィヤもソユーズもともに「連邦」と訳されているために、特に第四四章において、もはや「連邦」論を放棄したゴルバチョフの構想が「連邦」と訳されるという混乱は、ゴルバチョフの思想の根幹にかかわるだけに、再版時の訂正を期待したい。

［工藤精一郎・鈴木康雄訳・新潮社、上下とも四八〇〇円］